

子どもの本のひみつ

Vol. 3

題字・イラスト 陣崎草子

言わせて!

2018年3月21日、京都文教大学サテライトキャンパス伏見大手筋で、「連続トークイベント 子どもの本のひみつ③」が開催されました。トークゲストのひこ・田中さんと目黒 強さんによる刺激的なお話の中から、ごく一部をご紹介します。



Hiko Tanaka

今江祥智さんの『ぼんぼん』（理論社 1973）を読んで、児童文学の〈方法〉というのに出会ったんです。洋という**子どもの視点から書くと戦争ってこんなふうに表示できるんや**と新鮮でした。それで、評論だけでなく、そのつもりがなかった創作も始めました。

（児童文学との出会いについて）

森毅から学んだのは、結論を出さないってことかな。「これ」と「あれ」との間を行ったり来たり、うろろろすることの大切さっていうか。それって、実は、結論を決めてしまうことよりも、ずっと、メチャメチャしんどいことなんやね。

（「なりたて中学生」三部作を含むひこさんの作品に、森毅の影響が感じられるのですが、という質問に対して）

あのね、キャラを立てたくなかったんです。**キャラを立てると、キャラに思い入れを持ってしまって、成長させる方に力点を置いてしまうことになりかねない。**この作品では主人公の物語やなくて、中学校（……）を書きたかったから。

（「なりたて中学生」三部作について）

これからも動物をキャラクターにした幼年物語は絶対には書きません。とか言ってる、明日にでも書くかもしれないけど、基本的に書けないですね。**人間を動物に変換してしまうと、どうも落ち着かない。**

（「レッツ」シリーズを、幼児がどう読んでいるか気になる、という質問と係わって。動物がキャラクターだったら、発達段階とか、幼児の時間概念云々についてとかをクリアできる点で、幼年向け＝動物キャラみたいなのところがないですか、という更なる質問に対して）

石崎洋司さんの『黒魔女さんが通る!!』（講談社青い鳥文庫 2005～）という人気シリーズがありますが、この作品では、ホームページでキャラクターを募集するというをずっとやっています。読者から寄せられた面白いアイデアを物語作りに反映させながら、物語を創っているのです。ここでは、**作者と読者はこちらとあちらに分かれてはいません。一緒に作品を創っているわけで、**こういう「物語体験」というか、「物語消費」のあり方が興味深いです。

（現代の子どもの物語体験のあり方について）



Tsuyoshi Meguro

近代児童文学を、その黎明期から順にたどっていくという作業を続けていくと、はっきり見えてくることがあります。それは、教育的な配慮という観点から、子どものためになるいわゆる**「良い本」とそうでない「悪い本」を選別しようという、手渡し手の側の意志**です。

（明治の近代児童文学草創期の研究を続けてきた中から、気づいたことは、との質問に）

「良書」というのは、「悪書」と対の概念ですよ。 「良い本」を選ぶ作業は、無意識のうちに「悪い本」を排除することを伴います。なので、**一度、「良書」という枠組みをはずしてみましようよ、**ということはお伝えしたいです。そして、子どもたち自身が面白がっているものを、その面白さがわからなくてもよいので、手に取り、子どもたちに歩み寄ってほしいです。

（手渡し手に望むことは、と問われて）

ヨシタケシンスケさん（「レッツ」シリーズ）や、こはらかずのさん（「サンタちゃん」）と最初に絵本の仕事をしたときね、こっちの描いたテキストにヨシタケさんが出てくる絵が、テキストの修正を迫ってくる感じがしたんです。こっちが書いているつもり「子どもの視点」に対してヨシタケさんの絵が、**まだまだ大人の視点やでってメッセージを送ってくれている気がしたんやね。**他の人と組んで仕事するって、すごく勉強になります。

（絵本や幼年文学を書くことについて）

（司会者からのつぶやき……）

選書って難しいなあ……。でも、『お上』に任せるのはあかん。いっそ、ひとり一人が、子どもも入れて、「マイセレクトベスト10」みたいなのを作って、みんなで持ち寄って、えーっ!とかウソッ!とかわいわいやるのがいいかも。けど、うーん、絵本なんかの選書はどうしてるのかなあ……。

（選書の悩みが綴られた何通ものアンケートを読んで）

創作の方たちにお願したいのは、とにかく、**自分の作品のことを、どんどん外に向けて発信して欲しい**ということです。ウェブも活用して下さい。ウェブ世代からすると、ネット検索で感想などがヒットしない作品は、存在しないに等しいからです。

（書き手に望むこと、と問われて）

キャラクターが人間以外であること、とりわけ動物であることが、幼年物には多いのですが、それによって**子どもの発達段階とか、ジェンダーとか、いろいろなもの**がスキップできる。そういう利点があります。だから（……）、ひこさんはゼツタイにやらないと思いますよ。

（幼年物、幼児向けの作品について）

■ひこ・田中 (ひこ たなか)

大阪府生まれ。同志社大学文学部卒業。作家。「児童文学書評」主宰。1990年『お引越し』で第1回椋鳩十児童文学賞受賞。1997年『ごめん』で第44回産経児童出版文化賞 JR 賞受賞。2017年『なりたて中学生 初級編・中級編・上級編』で第57回日本児童文学者協会賞受賞。

『お引越し』(福音館書店)

デビュー作。主人公が両親の離婚を見つめる様を通して家族のかたちを問う作品。と読まれるし紹介されることが多いがそれだけではない。主人公の心理の流れを一筋縄ではいかない一人称で描く、当時とても新しい児童文学だった。版を数度改め、最新版では登場人物たちの現在が描かれたことで、「懐かしく読む」のができない作品になったと思う。



『レッツ』シリーズ(絵・ヨシタケシンスケ そうえん社)

幼年童話。レッツは5才だが、1冊め『レッツとネコさん』では昔のことつまり3才のことを思い出す話からスタートし、2冊め『レッツのふみだい』では4才を思い出す。3冊目『レッツがおつかい』で5才の日常が進んでいく。子どもをひとりの人間として描くなら、何歳だろうが昔をなつかしむのは当たり前だ。その当たり前がこうして形をとると、豊かで鮮やかな生活史として浮かび上がってくる。



■目黒 強 (めぐろ つよし)

長崎県生まれ。神戸大学大学院准教授。評論家。共著に『「場所」から読み解く世界児童文学事典』(原書房)、『10代のためのYAブックガイド150!』など。その他、児童文学に関する研究論文多数。

『なりたて中学生』シリーズ(講談社)

成田鉄雄は小学校卒業前に引越して、親友たちとは別の中学に行く羽目になる。家庭の事情などを主人公のぼやき口調で語るの『お引越し』でも見られたが、大きく違うのはあちらが心理的負担の変化を描いたのに対して、こちらは中学生の日常をこれでもかと平坦に描いたこと。だから、「物語」を起伏と捉えていると足元を掬われてしまう。



その他の著書:

『カレンダー』『メランコリー・サガ』『ロックなハート』(福音館書店)、『大人のための児童文学講座』(徳間書店)、『ふしぎなふしぎな子どもの物語なぜ成長を描かなくなったのか?』(光文社)、『サンタさんったら、もう!』『ひつつきむし』(WAVE出版)、『へたなんよ』(光村教育図書)、『ハルとカナ』『サンタちゃん』(講談社)。他に共著:『13歳からの絵本ガイド YAのための100冊』(西村書店)、『今すぐ読みたい! 10代のためのYAブックガイド150!』1・2(ポプラ社)など。

「行く行ってみよう!」

京都伏見から鴨川、東山へ

「この本のひみつ」第三回の会場は、京都文教大学サテライトキャンパス伏見大手筋。京都から近鉄線に乗り「桃山御陵前」駅で降りると、「大手筋」のアーケード商店街が賑わっています。その途中のビルの2階が今回の会場。周辺には明治天皇陵「桃山御陵」や、「月桂冠」「黄桜」の酒造など見所いろいろなのですが、中でも、司馬遼太郎の『龍馬がゆく』で「伏見寺田屋」の一章を割いて描かれている老舗旅館「寺田屋」ははずせません。「大手筋」のアーケードから横道の「龍馬通り商店街」を抜けて、川沿いに出ると今も泊まれる「寺田屋」があります。お登勢という名女将がきりもりし、幕末の志士たちの常宿として様々な事件もあつた旅館ですが、とりわけ慶応2年(1986年)早春に、伏見奉行所の大勢の捕吏が龍馬を捕えようと寺田屋を取り囲んだ事件は有名です。周囲の異変に気づいたのは、深夜、風呂に入っていたおりょう。彼女は、裸のまま龍馬の部屋へ駆け上がり、「坂本様」「捕り方でございます」と告げ、唐紙障子をはずすなど奮闘します。この「おりょうの裸の注進」により、龍馬は逃げる事ができました。なんともスリルと色っぽさに満ちたこの場面が、子ども向けの龍馬伝ではどんなふうで描かれているか、気になるところです。

さて、伏見から京都駅に戻って、七条通りをちよっと歩けば、鴨川に出ます。ここまで来ると駅前喧騒から抜けて、北山方面の川上から、南禅寺、清水寺などを含む東山の山々へと視界が広がり、京都に来たなあ〜という気分になります。ひこ・田中作『お引越し』では、レンコが川辺でユリカモメに食パンを投げてあげると「空中でくわえるの」という話が出てきます。まさに、京都の子ならではの楽しみ。ただし、よく見ると『お引越し』では「賀茂川」と書かれているので、下鴨神社のあたりで鴨川に合流するその一方の川のことを指しているのでしょう。鴨川を北上した左京区といわれるそのあたりは、「恵文社」「ホホホ座」といった個人的な本屋や京都大学のキャンパスもあり、ひこさんは、この京都大学の森毅さんの研究室によく遊びに行ったりとか。数学者・哲学者の森毅の随筆「まちがったっていいじゃないか」「元気がなくてもええやんか」などのエッセンスは、なるほど、ひこワールドにもひそかに受け継がれている気がします。

京都ゆかりの児童文学では、越水利江子の『風のラウソング』も印象的。高知から京都へ養女となった作者の自伝的な短編連作集ですが、東山三十六峰のひとつ泉山周辺が舞台となっていて、子どもたちの日常には、京都のお山やお寺やお祭りが、あたりまえのように存在しているのです。

(注)「寺田屋」は老朽化のため宿泊は一時休業中。来年再開予定です。



児文協研究部 「連続トークイベント 子どもの本のひみつ」 今後の予定

第4回

トークゲスト 林 木林 × 本間 ちひろ 司会 小林 雅子

日時 2018年7月20日(金) 18時~20時(受付17時半~)

場所 ブックハウスカフェ(東京・神保町) <https://www.bookhousecafe.jp/>
(〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-5 北沢ビル1F 「神保町」駅A1出口徒歩1分)

参加費 1,000円(ドリンクつき) 定員 35名
ブックハウスカフェまで、電話・問い合わせフォームでお申込みください。
電話 03-6261-6177 <https://www.bookhousecafe.jp/contact/>

※どなたでも参加できます! ぜひどうぞ。詳細は、日本児童文学者協会HPにて <http://jibunkyo.main.jp/>

